

「第9／実務者・教育者・研究者の討議の集い」2010 in 富山 主催 北陸支部

テーマ：「夢と希望」 (深耕をつなぐ)

制作：討議の集いグループ

【はじめに】

討議の集いは、実務・研究・教育の風通しの良いコミュニケーションを図ることを目的として、9年前、本会大会が金沢で開催されたときに大会関連行事としてスタートし、その後、大会開催に合わせて実施されてきております。3年前からは、若い方と大人の交流を積極的に行うことにより、学生シンポジオンの終了後に実施するようになり、文字通り、老若男女、交流の場となっております。

今回の集いは、「夢と希望」をテーマに、(午後に開催された)語り合いのシンポジオンの延長戦として討議することにして、参加を広く呼びかけましたところ、若者は3大学から14人、建築人(大人)は4人の計18人が集まり、夢や希望について大いに語り合いました。以下に、報告いたします。

【あいさつ】

語り合いのシンポジオンの余韻をそのままに、場所を変えて、参加者間でより一層のテーマの掘り下げを行います。まだよちよち歩きの夢をしっかりと育むための交流の場として、「深耕」が親交につながるようにトークとフリーディスカッションを行います。(by 永野紳一郎)

【1】 概要

懇親会：討議の集い

日時：2010年9月10日(金)18:00~20:00頃

会場：富山大学生協食堂

世話人：永野紳一郎(金沢工大)、富樫豊(富山支所)

【2】 プレトーク

1. 佐久間博氏(設計、東京)

建築の夢、建築の課題

今、約100年前に書かれたオットー・ワグナーの「近代建築」を読み返している。全然古くない。むしろ、今の日本に対して書かれた感さえある。

建築家の資質で最も、大事なことは何か？ 建築(芸術)の最大課題は何か？ この2つを考え合わせれば、今、建築に関わる人たちが、何をしなければならぬか、はっきりと見えてくる。

敗戦、奇跡の復興で世界第2の経済大国！ バブル、失われた10年、大地震・・・、少子高齢化、エコ。様々な標語が踊ったが、現実の街の姿、我々の生活の器は、どんな状態か。

すべてのものは芸術的でなければならない。そうでないとすれば、それらはすべて、芸術の課題である。なんと膨大な課題が、芸術に課されていることか。しかし、その課題が見えないとすれば、それはその人が芸術家ではないということ。

2. 小森忠氏(行政、富山)

建築というと、ハードとソフトの二面から構成されているのにもかかわらず、建築従事者の多くはソフトに弱く、ハードそのものが技術とおもっている。

3. 寄稿 街づくり某講演会にて ある街づくり人

建築系の団体が主催する全国規模の街づくりに関する講演会で、街づくり専門家の某先生が「街づくりとして居住空間に美を追求したい」と主張されておられました。このフレーズを聞いてすぐに思ったことがあります。今から4~5年前、某地域の街づくりについて大家のような専門家(実務家)がおられ、彼は「美しい街はいい街なのである」と主張されていたものだから、私は「捉え方が逆です。いい街が美しいのです」と言い返したことがありました。なぜ美が先行するのでしょうか、いま建築では形ばかりを追及する方が少なからずおられますが、街づくりもそんな観点の延長でやっておられるのでしょうか。(この方の場合、)実務を忠実にまじめにこなすあまり、本質がなかなか見えにくくなったといってもいいでしょう。(この後、一緒にワークを行いました。端々で意見がぶつかりました。)

そして、今年、都会の社会派建築家の方と街づくりについて議論することがありました。彼は「美の根源は広いものであり、美しい街と悪い街とは結果的に同じである」と盛んに主張されたものだから、この世における美については、一部の方の都合の良いように狭くとらえられがちであり、建築家の一部がそれに便乗しているので、安易に美というべきではない、と言ったことがあります。もちろん、彼の場合は先ほどの方とは違って、表面的に美を論じている訳ではなく、ほんまもの捉え方でした。

こうした議論を重ねておりますと、美とか感性とかいった本来的なものが、(建築の分野に)もっととりあげられてもいい時期に入ってきており、美を広くおおらかに捉える動きが、美を都合の良いように使う風潮に抗して生まれているようにもみえます。某先生の発言もそんな話と解釈いたしました。いろいろな切り口でアプローチする多様性があってもいいし、

そうあるべきです。多様なアプローチの講演会、楽しく面白く語り合いました。

4. 木村正彦氏(電力、名古屋) 論文寄稿

5. 栗原知子氏(院生、福井) エッセイ寄稿

6. 富樫豊氏(教育、富山) エッセイ寄稿

【3】 本番トーク

学生14人、建築人4人の計18人による、多種多様な観点からトークを楽しんだ。トークを若干列挙する；

- ・ 建築は、まず経済性を先行させて、その上で技術を展開して欲しい。建築学会では、経済性の論点が弱い。
- ・ 大学は行政と企業をうごかさなくてはならない。研究費をもっと集めてくる必要がある。
- ・ 産官学連携として、学が指導的立場にあるが、もっと産官を知ることが必要である。
- ・ 大学教員の企業へのインターンシップも面白い。
- ・ ロマンは愛。愛は語り。夢が(まったく)無いのは大人。
- ・ ロマンはまず遊びから。子供が遊ばなくなっているのは、大人が遊びを忘れているから。学生諸君、大いに遊ぼう。
- ・ 夢をみることのできない環境が大いに問題である。
- ・ 学問は知を愛するというものである。

シンポジオンの感想として；

- ・ 建造物群をグループで自由に制作しているチームがあった。いいですね。今後はもっとまとまりを入れるとさらに良いものになりますね。
- ・ 現実の土地をあてがってのものづくりは、ものすごく楽しそうに見えました。いいなあ。
- ・ 子供といっしょになって、いわば交流もいいですね。
- ・ 他のチームもがんばっていることがわかった。交流をもっとしたい。

【4】 アフタートーク

1. 栗原知子氏(福井大)

私は、シンポジオンの終盤からの参加でしたので、学生の皆さんの発表を聞いていませんが、少しの時間、名古屋市立大の「だがねランド」の発表をされていた方たちとお話することができました。ほんとうに5分程のおしゃべりでしたが、名古屋市立大の皆さんは、自分たちが「楽しんで」事業に参加していることや、そのことに「誇り」を持って挑んでいることを一生懸命話してくださいました。一つ質問をすると、10も20も30も返事が返ってくるのです。「だがねランド」は、ドイツ・ミュンヘンで行われている「ミニミュンヘン



資料に目を通し語り合い、後にサプライズ



熱弁をふるう建築人達



白熱の議論



ロマンは遊びから、皿回しに熱中

ン（子どもが主体的に子どもだけの街をつくって、遊びを通して社会性を学ぶイベント）」を手本にした、子どものためのイベントです。学生の皆さんは、子どもたちが作るお店や家の制作補助などをされたそうです。

「だがねランド」のように、大学・ゼミとして市の事業に参加・協力をした体験を発表する大学に対し、福井大学の発表は、こじんまりとした小さなコンペへの挑戦について発表をされていました。最後の感想を述べる場で、彼らは「他大学に比べ、僕たちの発表の内容は小規模なものでした」と話していましたが、自分たちで挑戦対象を発見し、挑む姿にとっても感心し「学生っていいなあ」「若いっていいなあ」と改めて感じる機会となりました。

また、学生時代を終えても、今なお夢と希望を持ち、それに挑戦し続ける姿勢をくずさない、子どもイタズラ村の早川氏も夜遅くまで集いに参加しておられました。皿回しやサソリ・蛇のおもちゃなど、「子ども相手？」と思うような様々な遊び心いっぱいの商品をたくさんご持参いただき、私たちはまんまと皿回しの虜になってしまいました。サソリのイタズラおもちゃにビックリする姿を皆で笑い、素朴な、本当に素朴な小さなおもちゃ一つで、会場の皆の心が一つになる場面が多々ありました。

新たな挑戦を通して、新たな自分・世界を知ることや、体験し成長する皆さんの姿にロマンを感じました。またその気持ちは自分次第でいつまでも持ち続けることができるのだと、「夢と希望」への熱い思いを呼び起こされた、良い会だったと思います。

2. 岩瀬慎吾氏（富山建築・デザイン専門学校）

先日行われたシンポジオンでは、大学生の方々の中、唯一の専門学生として参加させていただきました。

みなさんの作品は、伝統として引き継いだもの、地域のために実行されたもの、町の一角に展示されるものとどれも形となる素晴らしい作品や活動ばかりでした。中には現地で実物を見たものもあり、その素晴らしさを改めて実感したものもありました。

それらに比べ、自分たちの作品はあまりに大きな規模での計画だったので実物が見ることができず少し残念です。時間に限りがあり、全ては伝えられませんでした。自分たちの作品を多くの方々に発表できるいい機会でした。大学生の方々の発表を聞くことができただけでも参加した価値はあったと思います。

これからもこのシンポジオンで得たものを生かし、今後も努力していきたいと思っています。

3. 乙川佳奈子氏（富山大学）

先日富山大学で行われた建築学会のシンポジウムで、私は授業で制作した椅子の発表と司会を務めました。富山大学の

他に、新潟大学、金沢工業大学、福井大学、名古屋市立大学、富山建築・デザイン専門学校の5つの学校の学生が参加しました。普段、他大学の建築学生と関わる機会がないため、他大学の活動の様子を知ることができとても新鮮でした。

プレゼンの話し方やパワーポイントの使い方など、これからの自分たちの発表に活かしていきたいと思えることがたくさんあり、とても勉強になりました。

また、今回の参加チームは大学院生が多かったということもあり、地域と密着した規模の大きい活動をしていてとても楽しそうだなと感じました。特に、名古屋市立大の「だがねランド」は、子供たちの設計した家を建てるというプロジェクトなのですが、このように楽しく建築に触れることができる環境を子供たちに提供するという事は、建築に興味を持つ子供が増えることに繋がり、日本の建築の将来がおもしろくなっていくことに繋がるのではないかと感じました。このような活動は日本全国に広がってほしいと思います。わたしもまた、発信者の一人になっていきたいです。

たくさんの発見をさせていただいたこのシンポジウムに感謝します。ありがとうございました。

4. 小林成光氏（新潟大学）



パソコンのトラブルから始まって幸先の悪いスタートとなってしまいましたが、順番を入れ替えていただき、また名古屋市立大学の方からパソコンをお借りして無事に発表することができました。他大学の方の発表を聞きながら、このシンポジオンでの発表が僕らも含めて「いわゆる建築」とは少し違うことに気づきました。仮設型

まちづくりやインсталレーション、プロダクト制作に近いもの、そして僕らは公園づくり。建物を建てるという選択肢以外のまちづくり活動が多く見受けられました。これらは、実際に作ったり、運営することが伴う活動でもありました。自分たちの手で仮想のものから、実際のものへの変換はなかなか体験できるものではなく、仮想と実際のギャップを埋めることは貴重な体験となったはず。それが、発表時に発表者の方から自信という印象を与えてくれたのだと思います。発表後のディスカッションの時間があまりなく、討議の集いにも参加できなかったために、それぞれの体験についての語り合いの場を持てなかったことがとても残念でした。しかし、自分たちとは違った形での活動について知ることはとても良い刺激と

なり、また、自分たちの活動を見直す機会ともなりました。

5. 畔柳昭佳氏 (名古屋市立大学)

思い起こせば今年の学会は天候も悪く、名古屋から台風と入れ替わりで富山に到着いたしました。富山でだがね旋風を巻き起こそうと息巻いてプレゼンに臨んだ甲斐もあり、だがねランドについての魅力を存分に伝えることができました。

とくに、その後の自由討議の時間や懇親会の場を設けていただいていたことによって、事例発表だけではつかめない、だがねランドに対するダイレクトな反応を得られたのが、私達にとっての大きな収穫だったと思います。

また、福井大学桜井研究室の方々や富山大学の学生と交流をはかることができたのも素晴らしい体験でした。事例の発表も大切ですが、発表後の自由討議の時間やさらにその後の懇親会によって生まれる学生同士のつながりにこそ、こういったシンポジオンの醍醐味があるのだと再認識しました。

個人的には、わかりやすい発表だったと様々な方から評価していただけたことが大きな自信となりました。振り返ってみると、小学生にもわかるように幾度となく噛み砕いてだがねランドについて説明をしてきたことが、人にわかりやすく物事を伝える訓練になっていたのだと思います。また、子ども達の興味を引きつけようと必死に説明を繰り返す中で、だがねランドの面白さをいきいきと魅力的に伝える能力も磨かれていったのだと思います。

「わかりやすく伝えること」「魅力的に伝えること」これら2点の能力を鍛えられるのが、子どもを対象にしたワークショップを大学生が行うことの良さだと思います。

最後に、だがねランドについて発表する機会を与えてくださったことを深く感謝いたします。この場を借りてお礼申し上げます。本シンポジオンでの出会いから、新たな活動が生まれることを願ってやみません。

6. 松澤光聡氏 (富山大学)

今回のシンポジオンには、富山大学の発表者として、また、司会者として参加させていただきました。他大学の皆さんの研究・活動の発表には、それぞれに独自の特徴がありました。今回のテーマである地域との関わり方についても、大学ごとにそれぞれ違った関わり方があり、とても興味深かったです。また、皆さんの研究・活動に対する熱意や、地域と積極的に関わろうとされている姿勢に、とても刺激を受けました。

自分にとって、あのような場で発表する機会をいただいたことは、とても良い経験となりました。大学の中だけではわからない自分たちの姿について、他大学の皆さんとの交流や意見交換などを通して、客観的に感じることができたからです。具体的には、説明やプレゼンの未熟さ、活動に対する考えの足りなさなどについて、気づかされました。さらに、自

分たちの活動について質問を頂き、それについて答えることで、自分たちのやってきた活動の意味や価値について、改めて考える良い機会にもなりました。

発表の場も有意義でしたが、それ以上に、私が有意義だと感じたのは懇親会の場です。食事やお酒、皿回しなどのレクリエーションを楽しみながらの交流は、とても楽しく有意義なものでした。和やかな場で、各々の研究や活動に関する話はもちろんのこと、研究室の雰囲気や、研究室に入った経緯、学部生時代の話など様々な興味深いお話を、たくさん聞かせていただくことができました。まだ大学2年生の自分にとって、福井大学と名古屋市立大学の大学院生の先輩方との交流は、とても貴重で為になるものでした。

和やかな場での討議の集い、参加させていただき本当によかったです。あの場での様々な出会いや気づきは、これからの自分の新たな活動や大学生活になんらかの形で影響してくると思います。有意義で素晴らしい会をありがとうございました。

7. 池田高康、吉田貴博、稲垣裕史、矢倉大地の各氏(福井大学)

吹き流し制作を通してチームで考えをまとめて一つのものをつくっていくことの難しさと楽しさを経験することができました。建築の場合に置き換えてみても、考えをまとめ、形を与えていくことは一人でできるものではありません。今回これらの活動を公の場で発表させていただける機会を得たことは、「制作」という活動のひとつのくぎりになったと思います。地域に根ざした文化を捉え、自分たちの考えを繁栄し形として表したのを、多くの方々知ってもらえる場を与えていただけたことで、自分たちの成長につながったと思います。ありがとうございました。(by 稲垣)

発表の場を設けていただいたおかげで自分の中でもやもやした、まとまらなかったものがかたちとなって発表することができました。苦手なプレゼンを克服する第一歩となりました。(by 矢倉)

シンポジオンでの発表は、自身の作品や考えを多くの方々に伝えるだけでなく、自身の作品に対する意見や感想を聞けたという点でとても有意義なものでした。また他大学の発表を聞けたことやその後の交流会も良い刺激となりました。ありがとうございました。(by 吉田)

他大学での活動が自分の学校でのそれと違うことが新鮮であり羨ましく思えました。(by 池田)

8. 北川萌未、篠田慶介氏 (金沢工業大学)

初めて学会というものに参加するので、会場に着くまではすごく緊張していました。でも、直前のトークラリーが終わって、入れ替わりで準備をするうちに、各チームの展示場所に模型、ポスター、家具など色んな作品が賑やかに飾られていき、次第に緊張もほぐれていきました。各チームの発表が始まり、皆さんがそれぞれ自分達の活動を思い思いに一所懸

命伝えようとしている姿が印象的でした。様々な学年の人達が全く違う内容の活動についてやりがいを持って取り組んでいて、建築という分野が本当に幅広いことをあらためて実感しました。下川先生からは「自分達の活動をアピールして、他の大学の人達と交流し、刺激をもらえばいいんだよ」と聞かされていたのですが、確かにその通りでした。皆さんそれぞれ発表内容が個性的だったのですが、一番印象に残っているのは「だがねランド2009」です。活動内容がすごくしっかりしていて、ポスターやチラシのデザインが上手いし、何よりも発表してた人の説明が上手い！

自分達の発表については、やや緊張気味だったこともあり、自分達がプロジェクト活動中に感じていた興奮や充実感、苦労などがちゃんと伝わったかどうか…。ただ、最後の交流タイムでは他のチームの人達が自分たちの展示を見に来てくれて、質問したり、感心してくれたりしたのがすごく嬉しかったです。月見光路プロジェクトをやってて良かったなと思った瞬間でした。

ただ、一つ残念だったのは、2人での参加だったので、他のチームの展示を見に行き行って話ができなかった事です。交流タイムの時間もちょっと短いような気がしました。

最後に、シンポジオンに参加された皆さん、お疲れさまでした。展示を見に来てくださった方々、ありがとうございます。これからもお互いに頑張っていきましょう。

9. 木村正彦氏(中部電力)

大人の参加者が極めて少ない。これでは、大人対若者の討議にはなりにくい。大人が、もっと、結集するようにしてほしいものである。

10. 早川隆志氏(NPO こども遊ばせ隊)

子ども力=遊び力が日本の家庭と子どもを元気にする。サソリの標本と皿回し遊びが子どもの幸せを築くと心から信じて。

11. 永野紳一郎氏(金沢工業大学)

集いには参加できず残念でしたが、どんなに素晴らしいシステムや技術もそれを担う夢がなくては、実社会での実りをもたらさないものとなります。今後も、夢とぶつかるであろう壁を乗り越えてゆく知力・体力の持ちようをそれぞれに出し合い吸収する場をつくることで、建築をやるぞという元気が出てくる源となるようにつないでゆきたいと思います。

【5】 おわりに

最後にまとめとして。いささか参加者が少なかったことは気にかかりますが、世代を超え、分野を越えて、夢と希望を大いに語り合い、大いに楽しむことができました。お集まりいただいた皆さんに感謝するとともに、この良いムードを今後もつないでいきたいと思っている次第です。

A. 付録

A1. 参加者リスト (討議の集い)

名古屋市立大学	6人
福井大学	6人
富山大学	2人
建築人	4人(富山2人、名古屋1人、福井1人)

計 18人

A2. 収支決算

収入	43,340円	前年度繰越	1,340円
		学生参加費 15人@2000	30,000円
		建築人参加費 3人@4000	12,000円
支出	35,820円	15人@3000	
		返品値引き有り	
残高	7,520円	次年度へ繰越	